
仮面ライダー555——after story

sabu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー555――after story

【Nコード】

N7292X

【作者名】

sabu

【あらすじ】

人間とオルフェノク

その狭間に揺られ

戦士は闘

う

第一話

ダダダダダッ！！

東京郊外廃工場、普段ならば立ち入り禁止の場所に轟音——機関銃の銃声が響き渡る。

「ガッ！…ハッ……！」

銃弾を浴び、倒れるパロットオルフェノクに対峙するのは盾と機関銃を構えた機動隊

「射撃止め！」

倒れてもなお撃ち続けていた隊員に部隊長が静止の声をかけた。

銃撃が止まり、機動隊員は微かに動くパロットオルフェノクを睨みつける。

そしてパロットオルフェノクの動きが完全に止まった次の瞬間、パロットオルフェノクの身体が灰となり崩れた。

「よしっ！」

「やった！」

パロットオルフェノクを倒したことで隊員達から歓声上がる。

「よし！事後処理をした後撤収用意！！」

「「「はい！」」」

オルフェノクの王——アークオルフェノクとの闘いは、友という多大な犠牲を払い、巧達が勝利を得た。

これで平和な日常に戻る。

巧達はそう確信した。

しかし、現実はどうもいかず、本能で感じ取ったのかアークオルフェノクが死んだことにより己の死期が近づいていることに気付いたオルフェノク達は死の不安から破壊衝動、殺人衝動に駆られ暴れるようになった。

オルフェノクが無作為に暴れることで日本政府も重い腰を上げ、警察、自衛隊を総動員して大掛かりなオルフェノク討伐計画を実行し

た。

アークオルフェノクの死が影響しているのかは不明だがオルフェノクの力は段々と落ちている。

そのためパロットオルフェノクのように通常兵器でもオルフェノクを倒すことは可能になりオルフェノクの討伐数は次第に増えていた。

しかし、いくら力が落ちているとはいえ未だその力は強大なもの、オルフェノク一匹倒すのにそれなりの犠牲が出てくる。

それでも暴れるオルフェノクを見過ごす訳にもいかなかったので人間とオルフェノクの闘いは続いていた。

そしてここにもオルフェノクとの闘いを続ける男が……………

「らあああああー!!」

「ぐっ!?!」

仮面ライダーファイズ——巧がフライオルフェノクに顔にストレートを決める。

ぐらつくフライオルフェノクにファイズはタックルをして押し倒す。

押し倒すとそのままマウントポジションを取り殴り続ける。

「おらっ!!」

「だっ!?!? がっ!!」

ある程度ダメージを与えると一旦距離を取りファイズポインターにミッションメモリーを差し込み右足に装着してフライオルフェノクを見据える。

《Exceed Charge》

「っ!!」

そして助走を付けて立ち上がりとするフライオルフェノクにクリムゾンスマッシュを決める。

「があああああ!!」

フライオルフェノクは絶叫して灰となった。

「はあ……はあ……」

「たっくん大丈夫!？」

変身を解いた巧に離れた所で見守っていた啓太郎が駆け寄る。

「ああ……大丈夫……だ」

「たっくん!？」

大丈夫と言う巧だが息も切々でお世辞にも余裕があるとは思えない。

「ここの所暴れるオルフェノクが多かったからね、早く帰って休も」

ここ一週間ほど巧はオルフェノクとの戦闘が続いていた。

それこそ休む暇も無く、巧の疲労はかなり溜まっていて今も啓太郎の支えが無ければ歩くのも辛い程である。

「たつくん、しっかり」

「ああ……」

西洋洗濯舗菊池に戻った巧は啓太郎に肩を借り中に入る。

「巧……」

「真理……」

中に入ると不安げな面持ちの真理が二人を出迎える。

「ほら、掴まって」

「ああ……」

啓太郎と交代して真理が巧を支えて部屋まで連れて行く。

「さ、横になって、何かいる？」

「水くれ……」

「分かった、待ってて」

「くっ！……はぁ……」

真理が部屋を出ていった後巧は大きい溜め息を吐き、そのまま目を閉じた。

「……ん…あ？寝てたのか」

巧が目を覚ましたのは午前七時過ぎ、フライオルフェノクとの闘いは前日の午後五時、丸半日寝ていたらしい。

「……あ？」

「すう…すう…」

体を起こすとベッドに頭を乗せて寝ている真理がいた。どうやらずっと傍に居てくれたようだ。

「まったく、風邪引くぞ」

既に十月も下旬、夜も冷える。

巧はそんな真理を呆れたように笑うと自分の掛布団を真理に掛けてベッドから降りる。

ふと机を見ると水とおぎりとみそ汁が置いてあるのを見つける。

「そっぴゃ、頼むだけ頼んだっけな」

昨日の自分の言葉を思い出しついでに喉の渇きも覚えたので水をついで一息に飲み、起きたばかりだが腹の虫が鳴くので同じく真理が用意してくれたであろうおにぎりとおぎりとみそ汁を食べる。

「……………美味い」

おにぎりは少し硬くなっていたが、辛めの塩が疲れている巧にはちょうどいい塩梅で、冷えたみそ汁も猫舌の巧にはありがたかった。

「……………ご馳走さん、……………おい、そろそろ……………っ！」

おにぎりとみそ汁を腹に納めると、寝ている真理を起こそうと手を伸ばす。

しかし、真理の肩に手をかけようとした瞬間、巧の手から灰が落ちる。

「……………もっ…っか……………」

巧も自分の限界に気付いている。
灰化が治まった手を見つめる巧

いつ死んでもおかしくない

今日にでも力尽きるかもしれない

底知れない恐怖に襲われる。

「んう……巧？」

「真理……」

そうしていると真理が目を覚ました。

「おはよう、体は大丈夫？」

「ああ……問題ない」

嘘だ、しかし真理を不安にさせたくない巧は気丈に振る舞う。

「そう、よかった」

巧の言葉に笑顔で返す真理に巧は何とも言えない安心感に包まれる。

「ご飯食べてくれたんだ、硬くなってなかった？」

「ああ、少し硬かったけど美味かったぜ」

「ありがと、じゃあ片付けるから」

「ああ」

そう言つて真理は食器を持って部屋を出ていった。

「……………ふう」

床に落ちた灰を片付ける前に真理が起きたので見つからずにすんだ事に安堵する。

「巧……………」

巧の思惑に反して真理は床に落ちた灰に気付いていた。

巧の死期が近づいているのにも。

「私が…私がしっかりしなきゃ」

一番辛いのは巧なのだ、そう言い聞かせて真理もまた気丈に振る舞うのであった。

第二話

「はあっっ！」

「ふんっ！」

「うわっ!？」

ゴリラオルフェノクに殴りかかる仮面ライダーデルタ——三原、しかしその特徴的な巨大な腕で弾き飛ばされる。

「おらあ！」

「がつ!？」

巨大な腕を持つゴリラオルフェノク、そのため動きは遅い、その隙についてスネークオルフェノク——海堂が切りかかる。

「しっかりしろ三原！」

「はっはい!Check！」

《Exceed Charge》

「はあっ！」

ゴリラオルフェノクをポイントし、ルシファーズハンマーでとどめをさす。

ゴリラオルフェノクは赤い炎に包まれ灰になる。

「いよっし！」

人間の姿に戻った海堂は大きくガッツポーズをする。

「ふう…ありがとうございました海堂さん」

変身を解いた三原は海堂に駆け寄る。

「おう、お疲れさん」

アークオルフェノクとの最終決戦の後、創才児童園でアルバイトを始めた三原と里奈

そしてどこかへ旅立った海堂

しかし、オルフェノクの暴走もあり、巧、三原は闘いを続け、そして戻って来た海堂も加わり三人は再び共闘するようになった。

「しっかし暴れる奴が多いな」

海堂はダルそうに愚痴をこぼす。

「……………海堂さんは、平気なんですか？」

いつも通りの海堂を見て三原はふと尋ねる。

「あん？平気な訳ねえだろ」

そう言つて海堂は三原の額に人差し指を突き付ける。

顔をのけ反らせる三原、海堂の手から灰が落ちるのに気付く。

「……………っ！」

幾度となく背中を任せるようになり二人は互いに多大な信頼を寄せるようになった。

故に現実を目の当たりにするのはかなりのショックである。

「……………しけた面してんじゃねえよ！」

「わわっ！？」

沈んだ表情の三原を見て海堂は空気を変えようと三原の首に腕を回し頭をガシガシと撫でる。

「ほら帰んぞ！」

「ちよっ！待ってくださいよ！」

一通り気がすむと三原を置いて歩きだす。

「……………」

三原は急いで海堂を追いかける。

影から二人を見つめる存在に気付かず………

「ああああ」

「ふへえええ」

妙な声を上げる巧と啓太郎、巧達は空いた時間を利用して都内の温泉を訪れていた。

「気持ち良いねえ、たつくん」

「ああああああ」

「たつくんって牛乳派？コーヒー牛乳派？僕はフルーツ牛乳かなあ」

「あああああ」

「たっくんあああしか言っていないよお」

「ああああ」

「あはは」

「ああああ」

「……………」

「のぼせるまで入るなんて馬鹿じゃない」

あの後妙にリラックスした二人は気付けばすっかりのぼせ、先に出
ていた真理に呆れられていた。

「はい、水」

「ああ……………」

「ありがとー……………」

「まったく……………あ、そうだ、待ってる間に見つけたんだけどここマ
ッサージコーナーあるみたいだから行ってみない？」

「マッサージ……?」

「いいね、行ってみようよたっくん」

「んー……行くか」

巧も二人に促されマッサージコーナーに行くことにした。

「はあ……」

「おふっ」

「だだだだだだ!」?

マッサージコーナーにやって来た三人はそれぞれ別々のコースを選んだ。

真理はエステコース、巧は一般コースでより重点的なコース、啓太郎はツボ押しでいわゆる痛いマッサージのコースで一人悲鳴を上げていた。

「ふう……」

「くはっ」

「痛い痛い痛い！！」

「エステって初めてだったけど結構いいわね」

「ふう…何かすっきりした」

「あははは、体が軽うううい！！」

温泉の帰り道、ツボ押しが体に合っていたのかすこぶる好調の啓太郎であった。

「啓太郎、うるさい」

「……ごめんなさい」

「腹減ったな、飯食いに行くか」

「だったらどこ行く？」

「そっだな……ん？」

どうしようかと相談していると突然ファイズフォンが鳴り出した。

「誰だ？」

とりあえず電話に出てみる。

『乾……さん』

「お前は…三原か」

『はい……』

電話の相手は三原だった。

「どうした？」

『海堂さんが……海堂さんがっ!!』

「っ!?!何だ!何があった!?!」

電話の向こうからは三原の鳴咽が聞こえてきた。
巧もこれは大事だと思い三原を問いたです。

『海堂さんが…海堂さんが

殺された！！』

第三話

「三原っ!!」

巧達は一旦店に戻って配達用の車に乗り三原に指示された場所にや
つて来た。

そこにはこちらに背を向けて座り込む三原と立ち尽くす里奈がいた。

「三原!!」

「乾…さん」

巧に気付いた三原はゆっくり振り返る。

三原の目は赤く腫れて、その手には『灰』が握られていた。

「っ!!まさ…か……!!」

「そんな……!!」

「なんで!!」

「何があつた!!」

海堂の死にショックが隠しきれない三人
巧は三原に何があつたのか問いただす。

「あいつです……」

「あいつ!?!」

「あいつ……ラッキークローバーの女です!!」

「あの女か……!!」

三原によるとゴリラオルフェノクを倒した二人は帰路についていた。

しばらくバイクを走らせていると突然何かに襲われた。

何とか受け身を取り体制を立て直し相手を見据え相手を確認する。

襲撃者の正体はロブスターオルフェノク——影山冴子だった。

二人は変身してロブスターオルフェノクに立ち向かうがアークオル
フェノクから与えられた力は大きく二人は苦戦を強いられた。

その内追い込まれたデルタとスネークオルフェノク、なす術もなくスネークオルフェノクはロブスターオルフェノクの前に倒れる。デルタもベルトを破壊されるがとどめは刺されず、この事を巧に伝えろと三原だけは見逃された。

「敵打ち…つてことか？」

「おそらく……」

「どこだ」

「え？」

「あの女はどこにいる？」

巧の目は怒りに満ちていた。

「……あいつは……スマートブレインタワーの建設予定地、オルフェノクの王と闘った場所の上にいると」

「……分かった」

冴子の居場所を聞いた巧は車に乗り込む。

「巧！」

「来るな!!」

「っ！」

「お前らは来るな……俺一人で行く」

巧はそれだけ言つと車を走らせた。

「巧……」

「たっくん……」

その場に残された四人は呆然と立ち尽くしていた。

第四話

「出てこいよ、いるんだろ」

スマートブレインタワー・建設予定地跡に着いた巧

どこかにいるであろうロブスターオルフェノクに呼びかける。

「お久しぶりね、乾巧」

巧の背後からロブスターオルフェノクは声をかける。

「まだ生きてたのか、しぶといな」

「あら、しつこい女は嫌い？」

「さあな、でもてめえが気に入らねえのは確かだ」

「あら、酷い」

「細かい事は好きじゃねえ、お互い理由は一緒だろ、とつとと白黒つけようぜ」

既にベルトは巻いてある。

巧はゆつくりと変身コードを入力する。

《S t a n d i n g b y》

「ごめんなさいね、シャンプンを用意するのを忘れたわ」

「言ってる……変身!!」

《C o m p l e t e》

巧の体が赤い閃光に包まれファイズに変身する。

「行くぜ!!」

手首をスナップさせ、ロブスターオルフェノクに向かう。

「急いで啓太郎!!」

「分かってる!!」

啓太郎の運転するバイクの後ろに乗って真理は啓太郎を急かす。
ちなみにバイクは三原から借りた。

「早く！……早くこれを………！」

真理の腕には『トランク』のような物が握られていた。

「分かってるよ………！」

啓太郎はアクセルを踏む。

《Exceed Charge》

「はあっ！……！」

クリムゾンスマッシュを決めようとするファイズ

「ふっ！」

しかし、ロブスターオルフェノクには届かず弾かれてしまう。

「はぁ…はぁ…」

既に息が上がっているファイズ、このまま長引かせるのは不味いとファイズアクセルからアクセルメモリーを抜き取る。

「はっ！」

「なっ！？」

しかし、そうはさせないとロブスターオルフェノクはアクセルメモリーを貫く。

粉々になるアクセルメモリー

「ちいっ！！」

ファイズは苦々しく舌打ちをする。

フォンブラスターで牽制して一旦距離を取る。

「ふっ！」

「はぁ…はぁ…はぁ………」

「そろそろ限界かしら」

ロブスターオルフェノクが皮肉げに声をかける。

「はっ！馬鹿言ってるじゃねえ」

強気に答えるが確かに限界が近づいていた。
体力的にも、「身体」的にも

「フッフ…せめて苦しまない様に逝かせてあげるわ」

そう言つてサーベルを構える。

「死になさい！」

ダダダダダッ！！

「っ！？」

ファイズに向かって斬りかかるロブスターオルフェノク、しかし背中
中の突然の衝撃に動きが止まる。

振り返るとそこには機関銃を構えた機動隊がいた。

どうやら誰かが通報したらしい。

「撃てえっ！撃ち続ける！！」

隊長の指揮の下、隊員がロブスターオルフェノクに向けて撃ち続ける。

「……人間ごときが」

しかし、ロブスターオルフェノクには全く効いていなかった。それでも目障りなものには変わらず、ロブスターオルフェノクは機動隊を先に潰そうとそちらに向かう。

「待ちやがれ……！」

「巧！！」

ロブスターオルフェノクを止めようと走り出そうとした時、ファイズに呼びかける声が聞こえた。真理だ。

「真理！？来るなって言っただろ！！」

「そんなことはいいいから！受け取って！！」

そう言って真理はファイズの最強形態、ファイズ・ブラスターフォームに変身する為のトランクボックス型トランスジェネレータ・『ファイズブラスター』を投げる。

「これなら……よしっ！」

ファイズブラスターに変身コードを入力してファイズフォンをファイズブラスターにセットする。

《S t a n d i n g b y》

《A w a k e n i n g》

するとファイズのスーツの色が赤から黒に——ファイズ・ブラスターフォームに変身した。

「うわぁー!!」

「につー！逃げろー!!」

既に機動隊はロブスターオルフェノクにより陣形は瓦解していた。

「死になさい」

手始めに見せしめとして近くで腰を抜かしていた隊員を殺そうとした瞬間、何かに吹き飛ばされた。

「なっ！なに！」

その何かを確認する。

「ファイズ！？」

その正体は^{フォトン・フィールド・フロター}PFFを起動し、空中を飛行しているファイズBFだった。

ファイズBFは空中を旋回すると再びロプスターオルフェノクに向かう。

「くっ！」

逃げようとしたロプスターオルフェノクだがそれも叶わずあっさりと追い付かれる。

ロプスターオルフェノクに追い付いたファイズBFは攻撃しようとはせずロプスターオルフェノクを掴み、共に上昇した。
ある程度上昇するとロプスターオルフェノクを離し、体制を立て直す。

「らあああああああああああ！！！」

そして落下するロブスターオルフェノクに向けて超強化クリムゾンスマッシュを浴びせる。

「ぎゃあああああああああああー!!」

超強化クリムゾンスマッシュを受けたロブスターオルフェノクは絶叫して灰となった。

「つと……」

ロブスターオルフェノクを倒したファイズBF、変身を解いた巧はその場に倒れ込む。

「巧!!」

「たっくん!!」

倒れた巧に真理と啓太郎が駆け寄る。

「真理…… 啓太郎……」

「巧、手……」

真理に言われて自分の手を見ると止めどなく灰が落ちていた。

「もう……限界だな……」

「そんな……」

「たつくん……」

「そんな顔……すんなよ……楽しかったぜ……お前らと出会えて」

その言葉を切つ掛けに真理との出会いから走馬灯のように今までの思い出が蘇る。

「今まで……ありがとな……」

「巧……やだよ、やだやだ!!」

「ガキか……お前は」

「だって……」

「真理………最後だ、冥土の土産でもくんねえか？」

「………バカ」

「はっ……」

「……啓太郎、ちょっとあっち向いてて」

「う…うん」

「真理…」

「…何？」

「やっぱ俺…お前の事…好きだわ」

「……バカ、アンタが死んだら毎年鍋焼うどん供えてやる」

「はっ」

「ふんっ」

「真理…」

「巧…」

「ん…」

「んう…」

どちらとなく、唇を重ねる。

そして顔を離し、巧が微笑みを浮かべた次の瞬間、巧の身体が完全に灰となった。

「巧……」

「たっくん……」

秋の空に二人の叫びが響き渡る。

エピソード

一年後

「啓太郎、出来たよ」

そう言つて真理はカセットコンロの火を止める。

「まさか本当にやるとは」

啓太郎は呆れながらその様子を見ていた。

「約束したからね、毎年鍋焼うどん供えてやるつと」

真理が作っていたものそれは鍋焼うどんだった。

しかもわざわざ巧の墓の前で。

「もう一年か……」

「うん……」

鍋焼うどんを供えると二人は当時の事を思い出すように黙り込む。

「オギヤア！オギヤア！」

しかし、その沈黙を打ち破る様に泣き声が墓地に響く。

泣き声の正体は赤ん坊で、その赤ん坊は啓太郎の腕に抱かれていた。

「あ、お腹空いた？ちよつと待ってね」

そう言つて真理は啓太郎から赤ん坊を受け取る。

「こつち見ないでよ」

「見ないよ」

啓太郎に釘を刺すと上着を捲り、赤ん坊に母乳を与える。

「でも本当驚いたよ、たつくんとの子供だなんて」

そう、この赤ん坊、実は巧と真理の子供であつた。

「まあね、一夜の過ちかな」

「間違いなの？」

「なわけ無いでしょ」

「だよね」

「ほら、マミもお父さんにバカって言うてやりなさい」

「ちよっ、真理ちゃん」

「冗談よ、さ、うどん食べよ」

「うん」

「啓太郎」

「分かってるよ、最高に美味しそうに、でしょ」

「よろしい、あのバカにあの世で後悔させてやるんだから」

「真理ちゃん……」

「何よ」

「何でもない」

真理に睨まれると啓太郎は黙って鍋焼うどんを食べ始める。

「本当、バカなんだから」

真理の弦は誰にも聞こえず風^{かぜ}に流された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7292x/>

仮面ライダー555——after story

2011年11月13日08時33分発行